

主 題：大患難の中での救い1

聖書箇所：ヨハネの黙示録 7章1-8節

前回、黙示録6：17「御怒りの大いなる日が来たのだ。だれがそれに耐えられよう。」という問いかけに対する一つの答えを見ました。それはだれもいないというものでした。この主のさばきに耐え得る人はだれひとりいない。つまりすべての罪人は必ずさばきを受け、だれひとりとしてそのさばきから逃れることはできないということです。人々は、神にお会いするのが恐ろしいゆえに、自然界に対して私を殺してくれと叫びました。死ねば神に会うことがなくて済むと彼らは思ったのです。神の御姿を、神の御顔を拝することがなくていいと。いかに彼らが愚かであったか——。みことばは、何をしようと間違いなく我々は神の前に立つと教えます。そして神のさばきを受けることを望んだ人々、つまりこの救いを拒んだ者たちは必ず例外なくさばきを受けると確かに聖書が教えています。

実はもう一つの答えがあります。すなわち、耐えられる人々がいるということです。だれがそれに耐えられよう、ここに耐えることのできる人たちがいる。それが書かれているのが7章です。そのことをヨハネは私たちに明らかにしてくれます。

どうぞ黙示録7章をお開きください。

7：1「この後、私は見た。」と、ヨハネはまた新たな幻を見たことを告げてくれます。六つ目の封印が解かれた後の話です。さっきもお話したように実はこの7章は六つ目の封印が解かれた後、七つ目の封印が解かれるまでの間に起こることであると書かれています。そしてこの7章に書かれていることは、患難時代の間に救いに与る人たちの話です。このことはまた後で私たちは見て行きます。

A. 御使いたちの働き 1-3節

まず1-3節を見てください。ここには御使いたちの働きが記されています。1節には「四人の御使い」の話が出て来て、2-3節には「もうひとりの御使い」の話が出て来ます。

1. 「四人の御使い」 1節

1節「この後、私は見た。四人の御使いが地の四隅に立って、地の四方の風を堅く押え、地にも海にもどんな木にも、吹きつけないようにしていた。」とあります。まずこの「四人の御使い」は「地の四隅に立って、地の四方の風を堅く押え」ていたと書かれてあります。その目的は、それによって「地にも海にもどんな木にも、吹きつけないようにしている」ためであったと。もう少し細かく見ると、まずこの1節に“四”という数字が並んでいることに気づかれたと思います。「四人の御使い」がいて、「地の四隅」があつて、「四方の風」が出て来ます。どれも“四”という数字が並んでいます。

1) 「四人の御使い」

まず「四人の御使い」、四人の天使たちは、主からある権威が与えられていることが2節後半に出て来ます。「彼は、地をも海をもそこなう権威を与えられた四人の御使いたちに、」と、「四人の御使い」たちに神様からいただいた権威が書かれています。それは「地をも海をもそこなう権威」であると。この「そこなう」というのは、「何かに害を及ぼす」という意味を持ったことばです。それがこの「四人の御使い」たちに与えられた権威です。ですからこの四人たちが、それだけなのかよくわかりませんが、しかし少なくとも彼らはこの地にいろいろな災いをもたらす権威が与えられた者たちであると、聖書は私たちに教えてくれます。

2) 「地の四隅に立って」

こういった権威を与えられた四人の天使たちは、1節「地の四隅に立って」いたと書いてあります。「地の四隅」、不思議な表現ですが、実はこのことばは「羅針盤、コンパスの四つの方位、全世界を示すために用いられた用語である」とマスター神学校のドクター・トーマスは説明します。ですからここで言われている「四隅」というのは全世界のことです。確かにイザヤ11：12を見ると、そこに散らされたイスラエルを再び集める話が出て来ます。「主は、国々のために旗を揚げ、イスラエルの散らされた者を取り集め、ユダの追い散らされた者を地の四隅から集められる。」と。ここにもこの「四隅」ということばが使われ、全世界に散っているイスラエルの人々をもう一度集めるとあります。ですから「地の四隅」が表しているのは全世界のことです。レオン・モリスという神学者も「ヨハネは御使いたちが全世界を支配していることを教えている」と言います。

3) 「地の四方の風を堅く押さえていた」：「風」

そしてもう一つ、この「四人の御使い」たちが「地の四方の風を堅く押え」ていると書かれています。「四方の風」、つまり東西南北から吹いてくる風を彼らは「堅く押え」ていたと。「堅く押え」というのは「引き

とめる」とか、その風を「支配する」という意味を持ったことばです。ですからこの「四人の御使い」たちは東西南北から起こってくる風が自由になるのを押さえていた、それを引きとめていたのです。

この「四方の風」と記されているものは神様のさばきと関連しています。エラムという国に関してのさばきがエレミヤ49:35-36にこう記されています。エラムというのはかつてのバビロンの東方にあって、イラン高原の南西端の地域にある国です。このエラムに対して、「:35 『見よ。わたしはエラムの力の源であるその弓を砕く。:36 わたしは天の四隅から、四方の風をエラムに來させ、彼らをこの四方の風で吹き散らし、エラムの散らされた者がはいらぬ国はないようにする。』と主が言われています。ここにも「四隅」や「四方の風」が出て来ます。ここに言われているのは、エラムに対する神様からのさばきです。きょうのテキスト7:1に出て来る「地の四方の風を堅く押え」ていたというのは、この四人の天使たちは神様が約束されているさばきが起こるのをしばらくの間引きとめていたということを教えています。

そしてそれは、ある時間がたって、しばらくの期間が終われば、このさばきが実際に起こることです。実はここには「堅く押え」ということばは出て来るのですが、それが解かれるということばは出て来ません。しかし、8章を見ると明らかに「堅く押え」られていたものが解放されているのを見て取ることができます。

今からそれを見て行きたいのですが、その前に7:1の次のことばに注意していただきたいのです。7:1の後半に「地にも海にもどんな木にも、吹きつけないように」とあります。この「地」、「海」、「木」ということばを覚えながら、8:6から見てください「すると、七つのラッパを持っていた七人の御使いはラッパを吹く用意をした。」、遂に最後の七つ目の封印が解かれます。そして、ラッパのさばきが始まります。7節「第一の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、血の混じった霧と火とが現われ、地上に投げられた。そして地上の三分の一が焼け、木の三分の一も焼け、青草が全部焼けてしまった。」とあります。「木」や「地」の話が出て来ています。8節「第二の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、火の燃えている大きな山のようなものが、海に投げ込まれた。そして海の三分の一が血となった。すると、海の中にいた、いのちのあるものの三分の一が死に、舟の三分の一も打ちこわされた。」と。「海」が出て来ます。先ほど7:1で「地」と「海」と「木」の話がありました。そして今お読みした8章に、それらが大変な災いを経験している様子が記されておりました。確かにしばらくの間この「四方の風を堅く押え」ていたけれども、8章でそれが確実に解放され、その風が吹き始めた様子を見て取れます。最後の封印が解かれ、ラッパのさばきが始まると、この地上には大変な災いが訪れます。その前に何が起こるのかがこの7章に記されています。

2. 「ひとりの御使い」 2-3節

今「四人の御使い」たちのことを見て来たのですが、「また私は見た。もうひとりの御使いが、生ける神の印を持って、日の出るほうから上って来た。」と、「もうひとりの御使い」のことが7:2-3に出て来ます。

1) 「この御使いの正体」

一体これはだれなのかです。ある人たちはこれは主イエス・キリストのことではないかと言います。でもこれはイエス様の話ではありません。なぜそう言い切れるかというと、実はこの「もうひとりの」という形容詞にその答えがあります。ギリシャ語には「もう一つの」とか「ほかの」という意味を表すことばは二つあります。一つは「アロス」、もう一つは「ヘテロス」です。この「アロス」ということばは新約聖書の中に155回出て来ます。「本質的には同じでありながら別のもの」という意味を持っています。

「ヘテロス」は新約聖書の中に98回出て来るのですが、「異なった種類の別のもの」です。

イエス様はこの「アロス」ということばをあのおの聖霊なる神様に対して使っておられます。「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。」とヨハネ14:16に出て来ます。「もうひとりの助け主」、ここに「もうひとりの」ということばが出ています。ここは「アロス」を使われています。なぜかというと、確かにイエス様と聖霊なる神様は見た目が違います。イエス様は肉体を持っていて、聖霊は肉体を持っていません。しかし、イエスが神であるように聖霊も神であり、本質的に同じだからです。だから「アロス」を使っているのです。

では「ヘテロス」はどんなところで使われているかというと、その中の一つがガラテヤ1:6です。ガラテヤの人々が伝えられた神様の真理の福音から外れて行く様子をパウロは嘆いています。「私は、キリストの恵みをもってあなたがたを召して下さったその方を、あなたがたがそんなにも急に見捨てて、ほかの福音に移って行くのに驚いています。」と。「ほかの」ということばです。自分たちが信じ、自分たちが教えて来た真理の福音と全く違う福音に人々が心を引き寄せられて行くのをパウロが嘆いているのです。福音という名前は同じでも内容が全く違う、全く異なるものだから、ここでは「アロス」ではなく「ヘテロス」を使っています。

きょうのテキストの黙示録7:2の「もうひとりの」は「アロス」を使っています。この「四人の御使い」とちと本質的に同じ「もうひとりの御使い」ということで、ここに出て来たのはこの四人と同じ天使たちであると言えます。

2) 「この御使いが手にしている物」: 「生ける神の印を持っている」

(1) 「生ける神」

この「もうひとりの御使い」は「生ける神の印を持って」いることが書かれています。この「生ける神」というのは旧約聖書や新約聖書において頻繁に用いられた表現です。私たちの神様は生きておられる神であり、この神には始まりがないだけでなく終わりがありません。永遠に存在しておられる。このような表現を使うことによって、いのちのない偶像と明らかに区別をしておられる。私たちがこれまで手を合わせて来た神と呼ぶものたちは、もう既に死んでしまったものであったり、人間が作ったもので、永遠のいのちなど持っていません。神はすべてをお造りなされた方であり、いのちの源であり、死ぬことなく今も生きておられ、永遠に生き続けられる方です。こういう表現を聞くとすごくうれしくなりません？私たちの神様は生きておられる。生きておられるからこの方はご自分のみこころを行なうのです。生きておられる方だから、いつもあなたとともにいてくださるのです。生きておられるから、あなたが何も言わなくてもあなたの必要を全部ご存じで、それだけではなくて、その必要をあなたに満たすことのおでくなる方です。どこに行こうと、いつもこの方がそばにいてくださる。決してあなたから離れない。それが私たちの神だということを私たちは改めてここで見るすることができます。私たちの神は生きておられるということは、旧約の人々であろうと新約の人々であろうと信仰者にとっての大きな励ましでした。

あのヨシュアたちが約束された地に向かって行く時に、この真理が彼らの心を励ましました。「『生ける神があなたがたのうちにおられ、あなたがたの前から、カナン人、ヘテ人、ヒビ人、ペリジ人、ギルガシ人、エモリ人、エブス人を、必ず追い払われることを、次のことで知らなければならない。』(ヨシュア3:10)と、つまり神は神の敵を追い払ってくださいと。ヨシュアたちがこの真理によって励まされました。神が我々に勝利を下さって、あなたはもう既に勝利者の側にいると。死に打ち勝たれた神があなたとともにいてくださると。かつてはどうすることもできなかった死に打ち勝った者として、私たちはきょうを生きることができるわけです。死んでも生きるという確信を持ってこの日を生きることができる。なぜなら私たちの神は生きておられる。またそのような神だから私たちを満らし続けることができるお方であると。どんなに物を得ても、心の満足を得ることができないことは我々もよく知っています。それを満たすことができるのは神だけだからです。神様は生きておられて、私たちのすべての必要をご存じであり、渇きを満たしてください。ダビデが「主は私の羊飼い。私は、乏しいことはありません。」(詩篇23:1)と言ったように、神が私のすべての必要をご存じで、私の必要を満してください。私には乏しいことがなく、私は満ち足りています。そういう地上での生活を我々信仰者は実際に歩むことができるわけです。もしそうでないなら、あなたの信仰のどこかに問題があります。こうして信仰者は生きて行きました。なぜならそれが神様の約束だからです。生きておられる神は私たちに与える大きな確信であり、私たちの力です。私たちの希望です。

(2) 「印」

その方の「印を持って」いると書かれています。印鑑のことです。判こというのは、それが何かに押されていたら、それには所有者がいるということを意味します。しかもその印を見ると、所有者がだれなのかがわかります。皆さんの所有物にもひょっとしたら判こを押しておられるかもしれない。旧約の時代において、また新約もそうでしたが、多くの王様が自分の指輪に印をつけていました。王様の判こです。例えばそれを書類に押すと、それは王の手から渡されたもの、王の権威を持ったものとなりました。王様の印が押されていると。普通の手紙ではないわけです。王様の印は王の権威や権力、所有権を証明し、保証するものでした。ですから、創世記41:42でヨセフがエジプトの王パロから国の司とされた時に、王は彼に王様がはめていた指輪を渡すのです。自分の権限をヨセフに委譲したことを象徴したわけです。

またダリヨス王がダニエルをライオンの穴に投げ込んだ後、彼がそこに印を押す様子がダニエル6:17に「王は王自身の印と貴人たちの印でそれを封印し、ダニエルについての処置が変えられないようにした。」と出て来ます。これは王の権威に基づいてなされたもので、これに逆らう者は王に逆らう者であると。

(3) 「この御使いの務め」——「神のしもべたちの額に印を押す」 3節

この「ひとりの御使い」は「生ける神の印を持って」いたのです。そして彼はその印を持って神のしもべたちの額に判こを押したのです。そのことによって彼らの所有者が一体だれなのかを明らかにするためです。この「もうひとりの御使い」はその「印を持って、日の出るほうから上って来た。」とあります。太陽の上の方、つまり東から上って来たということです。そしてこの「もうひとりの御使い」は「四人の御使いたちに、大声で叫んで」いると2節の後半に記されています。なぜ彼が「大声で叫ぶ」のか、意味があります。「大声で叫ぶ」というのは、彼の務めにおける緊急性を意味しています。例えば私たちも何かを今すぐやめてほしかったら「やめなさい！」と大声で叫びます。この「ひとりの御使い」は、「四人の御使いたち」に対して、今から私が言うことをちゃんと守り、そのとおりにしてほしい、その緊急性があったゆえに彼は「大声で

叫んで」いるわけです。

ではどんな務めがあるのか、3節を見てください。「『**私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまうまで、地にも海にも木にも害を与えてはいけない。**』」と。つまり神様のさばきが下る前にすべての神のしもべたちの額に生ける神の印を押すことが務めだとこの御使いは告げるわけです。ですから、最後のひとりの額に印を押すまで、四人の御使いが四方の風をしっかりと押さえ続け、さばきが及ぶことがないようにしなさいというのが彼が大声で叫んだことでした。

少し注目していただきたいのは、2節には「**ひとりの御使い**」と書いてあります。「**ひとりの御使い**」でありながら、3節には「**私たちが**」とあります。彼ひとりで行なうのなら「**私が**」と言うところを一人称の複数です。ということは、恐らく彼ひとりではなくて、「**四人の御使いたち**」も一緒になってこの働きを行なうのでしょう。

さて、ここに「**私たちが神のしもべたちの額に**」と、「**神のしもべたち**」ということばが出て来ます。これはクリスチャンたちの話です。もっと言えばこの「**神のしもべたち**」というのは神の「**奴隷**」ということばを使っています。この世界には神の奴隷かサタンの奴隷か、2種類の奴隷しかいません。生まれながらの人間は例外なくサタンの奴隷です。パウロは罪の奴隷だとも言っています。同じことです。ですから、この神の奴隷たちというのは、確かに罪から救い出され生まれ変わった者たち、クリスチャンたちの話です。しかし、ここで言われている「**神のしもべたち**」というのは、あなたや私のことではありません。ここで言われているのは、患難時代に救われた人たちのことです。なぜかというと、主イエス・キリストがクリスチャンを迎えに来てくださった空中携拳の後の話だからです。イエス様が我々クリスチャンを迎えに来てくださった後、地上にはだれひとりとしてクリスチャンがいなくなります。そして患難時代が始まり、その時代においてこの救いに与った人たちの話です。

もう一つ見ていただきたいのは、この「**印を押す**」という行為によって彼らが救われるわけではないということです。3節は、天使たちが神のしもべたち、つまりクリスチャンたちの「**額に印を押してしまうまで、**」と言っているわけで、この行為によって彼らが救われるのではなくて、救われているから御使いたちがこのようになさるとい話をしているのです。ですから旧約であろうと、新約であろうと、患難時代であろうと、どの時代でもこの救いに与るために必要なのは信仰です。人々がどんなよい働きと思うことをしても、行ないによって救いに与る人はだれひとりいません。どの時代でも同じです。信仰によって救われるのです。この3節が私たちに教えてくれるのは、このように信仰によって救いに与った患難時代のクリスチャンたちに天使たちがこの印を押すのだ、この人たちは神の所有なのだということです。

これをお読みになっていて、なぜ額なのかと思いませんか？もっと別のところに押したらと思うのですが、額というのは一番人目につきやすいし、額に何か書かれていたら人目を引きます。ここで言っていることは、額に印を押すことによってこの奴隷が誰に属しているのか、だれに仕える者なのかが人々の前で明らかにされるということです。人々が見た時に、この人は間違いなく神に属する者であると。神の奴隷であるということが明らかになるためです。

もう一つ考えると、実は黙示録13章の中に右手の甲か額にマークを付けなければ物を売ったり買ったりすることができない、そんな時代になることが言われています。666という数字です。その数字を身につける者たちは、救いに与る者たちではありません。彼らも額にその印がつけられている。ひょっとしたらその時代には額を見ると、神なのか、サタンなのか、だれに属しているのかが明らかに区別されるためなのかもしれません。

さて最初から我々が見ているように、8章になると大変な時代がやって来ます。恐らく人類がこれまでに経験したことのない災いの中で、額に神の印を押されたクリスチャンたちを神様は守り続けていくというのが3節の約束です。そしてこの後にもそのことが記されています。なぜそんなことを神様はあえてこの時にしたのかというと、これからまさに患難時代の後半が始まり、大患難と言われている大変な災いがこの世界に及ぶ時にあって、今から見るこの人々は、神様から特別な務めをいただいて、特別に選ばれたのです。その務めは福音宣教です。この人々はそのために選ばれたのです。

B. 印を押されたユダヤ人たち 4－8節

ではその選ばれた人々のことを少し見て行きましょう。4－8節に印を押されたユダヤ人たちの話が記されています。4節に「**それから私が、印を押された人々の数を聞くと、イスラエルの子孫のあらゆる部族の者が印を押されていて、十四万四千人であった。**」と出て来ます。

1. 「部族のリスト」 5－8節

一体ヨハネはだれに聞いたのでしょうか？だれがこの答えを与えてくれたのか書かれていません。恐らくヨハネが話していた「**もうひとりの御使い**」でしょう。「**十四万四千人**」の数があります。しかも彼らは「**イスラエルの子孫のあらゆる部族の者**」であると書かれています。いろいろな解釈をする人がいて、異端もこの箇所を使ってこの中に入らなければいけないと言いますが、残念ながら聖書はそんなことを教えていま

せん。ここに書いてあるのは、「イスラエルの子孫」です。確かにここに書かれていることばを字義どおり取るのか、それとも取らないのか、いろいろな議論がなされていることも事実です。しかし我々はこれを字義どおり取り取ります。というのはこの後にもこの数は出て来ます。しかもごらんいただくと、こうしてそれぞれの部族から1万2000人ずつと。明らかにこの部族からと明言されているわけです。この解釈に関して、ダラス神学校の元学長であったジョン・ワルボード先生は次のように言っています。「イスラエルという語は異邦人に対しては決して用いられておらず、人種的にイスラエル、あるいはヤコブの子孫である者に対してのみ用いられている」と。ですからこれを異邦人と取ることはできず、これは明らかにイスラエル民族の話であると。

ここに十二の部族のリストが挙がっています。「:5 ユダの部族で印を押された者が一万二千人、ルベンの部族で一万二千人、ガドの部族で一万二千人、:6 アセルの部族で一万二千人、ナフタリの部族で一万二千人、マナセの部族で一万二千人、:7 シメオンの部族で一万二千人、レビの部族で一万二千人、イッサカルの部族で一万二千人、:8 ゼブルンの部族で一万二千人、ヨセフの部族で一万二千人、ベニヤミンの部族で一万二千人、印を押された者がいた。」と、確かにこのように14万4000人を構成している部族が記されています。

2. 「不可解なリスト」 5-8節

ただこの部族のリストを見る時に、少し理解できないことがあります。というのは、この十二の部族というのは「イスラエルの子孫」です。つまりイスラエルと呼ばれたヤコブの12人の息子たちのリストなのです。そうすると、疑問が出て来るのは、12人の息子の中のひとり、ダンの名前が抜けているのです。そしてダンの代わりにヨセフの長子であるマナセの名前が載っています。なぜダンでなくてマナセなのか。またヨセフには双子の息子がいました。マナセだけが選ばれて双子の弟であるエフライムが選ばれていないのはどうしてか。リストを見ると、不思議なことが出て来ます。なぜ12名のすべての息子たちがここに記されていないのか——。ヨセフのふたりの子どものうち片方だけが載っていて、片方が載っていないのか——。実は、答えがあります。恐らくこういう理由でしょう。

1) どうして息子であるダンが入っていないのか？

どうして息子であるダンがこのリストに載っていないのか——。実はダンというのは偶像崇拜の罪に陥ったからです。I列王記12:28-30にも「王は相談して、金の子牛を二つ造り、彼らに言った。『もう、エルサレムに上る必要はない。イスラエルよ。ここに、あなたをエジプトから連れ上ったあなたの神々がおられる。』:29 それから、彼は一つをベテルに据え、一つをダンに安置した。:30 このことは罪となった。民はこの一つを礼拝するためダンにまで行った。」と記されています。ダンの偶像崇拜は罪です。恐らくそれが理由でこのリストに載らなかった。というのはこの14万4,000人というのは、先ほどもお話ししたように大切な役割を担っているのです。福音宣教をするという特別な働きのために、この地上に大変な災害が起こっても、この大患難の中、彼らは守られ、福音を語り続けるのです。ダンはこのような偶像崇拜の罪を行なった者たちだったから選ばれなかったのです。しかしとても感謝なことに千年王国が訪れる時、ダンはちゃんとそこに数えられています。神様は確かにきよく正しい方で厳しい方です。しかし同時にあわれみの方でもおられます。この働きに選ばれなかったけれども、その祝福が後には約束されています。それはエゼキエル書48:1-2、また32節の中にそのことが記されています。

2) どうしてマナセだけが選ばれて、双子の弟であったエフライムが選ばれていないのか？

では二つ目のエフライムはどうなのか——。エフライムもダンと同じように罪を犯したのです。ホセア4:17-19に「:17 エフライムは偶像に、くみしている。そのなすにまかせよ。」と。「:18 彼らは飲酒にふけり、淫行を重ね、彼らのみだらなふるまいで恥を愛した。:19 風はその翼で彼らを吹き飛ばす。彼らは自分たちの祭壇のために恥を見る。」と教えます。またホセア書5:1-3もこのエフライムに対しての非難があります。罪です。

3) どうしてヨセフの長子であるマナセが選ばれているのか？

ではエフライムでなくて、ヨセフの息子マナセが選ばれたのはどうしてかです。彼は忠実な息子だったからです。神様は主に対して忠実な者たちをちゃんとお使いになる。ここにおられるクリスチャンの皆さん、神様はあなたを神の栄光のために用いようとしてあなたを救ってくださり、生まれ変わらせてくださった。そして信仰を持ってから、あなたにすばらしい霊的な賜物を与えてくださった。それまで持っていた才能も当然神のために用いるのですが、今言っているのは霊的賜物です。イエス様を信じた時に神様が与えてくださるものです。それが与えられたということはそれを用いてあなたは主に仕えて行くということです、教会で仕えるということです。神は喜んであなたを使ってくださる。条件などありません。大切なことは、あなた自身が「ぜひ使ってください」という願いを持って自分を主に捧げているかどうかであり、もう一つはあなたが主によって用いられるにふさわしいきよい正しい者であるかどうかです。あなたが罪の中を歩んでおられるのなら、神様はあなたをお使いになることはできない。そうやって主に仕えるというすばらしい機会を逃してしまうのです。

3. 「特別なリスト」 5-8節

十二部族のリストが挙がっています。彼らは特別な働きのために選ばれた者たちでした。先ほどもお話ししたように大患難の時代において、彼らは福音宣教を行なうために選ばれたのです。そして神は彼らを守ると。黙示録14:1-5にシオンの山の上に子羊とともに14万4,000人の人がいることが記されています。この大変な大患難の中にあっても神が彼らを守られるのです。そして彼らが忠実にこの福音のメッセージを語り続けて行くのです。そして次回見ますが、その彼らの忠実な働きによってこの患難時代にイエス・キリストを信じる人々が世界じゅうに起こされるのです。この働きをするために神はこのような人々を選ばれたのです。

我々が少し考えなければいけないのは、私たちは神様の命じておられる働きを忠実にこなしているかどうかです。別の言い方をすれば、神はあなたや私を主イエス・キリストのいのちという大変な犠牲をもって救って下さいました。それは私たちがこのすばらしいイエス・キリストの福音のメッセージを伝えるためにです。そして弟子を造り、彼らを成長させるためにです。彼らはそのような働きを忠実にこなすのです。我々が今考えなければいけないのは、その働きを忠実にこなしているかどうかです。あなたは福音を恥じていませんか？主イエス・キリストを恥じていませんか？あなたがクリスチャンであることをあなたの周りの人は知っていて、あなたは機会を用いて彼らに福音を語り、いつも彼らの救いのために祈っている、そんな信仰者ですか？我々はそこを考えなければいけません。なぜなら私たちは終わりが近いことを知っています。終わりに何が起こるのかも聖書が私たちに教えてくれて知っています。それを知っている者として、終わりが来るということ、さばきが来るということ、しかし、そこにすばらしい神の備えてくださった救いがあるということを語る責任があります。そのことを語っておられるかどうか、これは信仰者であるあなたがいま一度考えてみる必要があることです。

10月1日にアメリカのオレゴン州の小さな町のアムプクワ・コミュニティ大学で9名の人たちのいのちが奪われました。テレビのインタビューを聞いてみると、こんな小さな田舎町でこんな事件が起こるとはと。9人が亡くなり7人が負傷したというニュースでした。犯人はクラスの学生たちひとりひとりにそれぞれの信仰が一体何なのか、一体何を信じているのかを聞いて回りました。そしてクリスチャンだったら彼らを立たせて、お前たちは1秒後に神にお会いすると言い、そのひとりひとりの頭を銃で撃ち抜いたわけです。私はテレビとインターネットで一般の報道を見ました。クリスチャンたちが記してくれた記事も読みました。こんな記事に目がとまりました。犯人が拳銃を持ってお前の信仰は何だとひとりひとりを回った時に、自分がイエス・キリストを信じるクリスチャンだと言うことは非常にやばいと察することができたはず。そういうことを言えばひょっとしたら殺されてしまうかもしれない。ですから、うそをつくこともできたはず。この人々の何人がクリスチャンだったのかわかりませんが、ここにいたクリスチャンたちは恥じることなく立ち上がり、自分がイエス様を信じていることを告白したわけです。そして彼らはイエス様のもとへ召されて行った。

私たちが考えなければいけないのは、確かに我々はそういう場面に遭遇したことはないです。考えなければいけないのは、私たちはイエス様のことを恥じていないかです。このすばらしい唯一の救いを恥じていないかです。こんなことを言ったら人が気分を害するのではない、我々が考えるべきことは彼らの気分が害されるかどうかではなく、彼らが永遠をどこで過ごすかです。ある人々はいのちがけで自分の信仰を明らかにした。今考えなければいけないのは、私たちひとりひとりがどうかです。何となくクリスチャンとして歩んでいる、そんな日々を過ごしていませんか？終わりは近いと言うのです。私たちの役割もはっきりしています。この福音を語り続けることです。終わりが近いからこそ、さばきの日が来る、それが事実だからこそ、そのために神様はあなたや私を救って下さった。大切なメッセージを託して下さいました。この福音を携えて出て行きませんか？人々の救いのために祈り始めませんか？そして余りにも多くの人たちが滅びに向かっていますから、どうぞ神様私をこの救いを伝える器として使ってください。神様は必ずあなたを使ってください。この終わりの時代にあつて、私たちの教会にあつて、そんな人が必要です。そんな信仰者であることを心から願います。そんな信仰者にならなうて行きましよう。このみことばに立つ者として。

《考えましよう》

1. 「四人の御使いたちが四隅に立ち、地の四方の風を堅く押さえていた」とありますが、どういう意味かを説明してください。
2. 「生ける神の印」を押されるのはどうしてですか。その理由を書いてください。
3. どうしてその印を額に押すのかを説明してください。
4. この14万4,000人はだれのことですか。また彼らの務めは何ですか？